

## 沈黙する発話、情動する身体 ——ルワンダに生き残る暴力の記憶と痛みへの想像力

近 藤 有希子  
(日本福祉大学)

はじめまして。近藤有希子と申します。今日は、私がこれまで関わってきたアフリカのルワンダという国で、その地に暮らす数人の経験を中心にお話しさせていただきます。最初に断っておけば、それは、紛れもなく「私」という存在をとおして見て聞いて触れてきた事柄であって、ルワンダ社会の微細な一端ではあるのですが、私がかれらと出会って感じ、考えたことを、短い時間ですが、共有させていただけたらと思っています。

ルワンダ共和国は、アフリカ大陸の内陸に位置しており、地図をぼんやり眺めているだけでは見逃してしまうほどの、ちいさな国です。四国の約 1.4 倍しかない国土に、人口が 1,200 万人ほどいて、アフリカ大陸一の人口密度を誇る国となっています。「千の丘の国」と例えられることもあるように、どこまでも丘陵の続く国です（スライド 3-4 参照）。近年の耕作地の狭隘化に伴って、丘の斜面は隅々まで几帳面に耕されています。ルワンダでは現在も、人口の 8 割が農業に従事しているといわれています。一方で首都のキガリでは、日々刻々と近代的な町並みに塗り替えられていっています（スライド 5 参照）。

ルワンダには従来、フトゥ、トゥチ、トゥワとされる人びとが、言語も宗教も違いなく混じりあって暮らしてきました。人口比は、フトゥが 8 割強、トゥチが 1 割強、そしてトゥワは 1% ほどとされています。そして、1990 年より深刻な紛争が発生し、1994 年には虐殺を経験するに至りました。この出来事は、多数派のフトゥによる少数派のトゥチへの虐殺として、ひろく知られてきました。そのような一枚岩の民族集団間の対立というイメージは、昨今のルワンダにおいても、公的な言説として醸成されて、執拗に語られています。

現在のルワンダの国家は、一方では虐殺の和解を迅速に達成して、経済開発においても目覚ましい成果を上げる「優等生」な国家として、国際社会から称賛されてきました。他方で、政治、経済、社会環境を軍事化して、締めつけを強めている側面もあり、公的空間や市民社会の後退した「強権的」な体制であるとして、非難がなされてもいます。虐殺後の国民統合と和解という名のもとに

創出されている「国家の歴史」からこぼれ落ちてしまう経験をもつ人びとが、沈黙を増幅させていることが指摘されています。このように、人びとの多様な記憶が選別され、一元化されながらおこなわれる国家再建の試みを前にして、多くの研究者が紛争の再発を懸念していてもいます。そして現在のルワンダ社会には、調査をとおして発表者自身も知覚してきたように、偏在する暴力を予感して身構える人の存在を見いだすことができるのです。

ところで、1990 年代に世界中で頻発した大規模な紛争や人権侵害に対しては、その復興や和解に向けて、さまざまな取り組みがなされてきました。なかでも、西洋型の紛争解決に向けた手続きにおいて、「語ること」が真実を同定して合意を促し、歴史を定義するうえで、沈黙に対して優位な行為とされてきました。

ルワンダにおいても、2006 年より全国の地方行政単位ごとに、虐殺に加担した者を裁くガチャチャ法廷というものが実施されて、そこでは「語ること」が促されていました。その一方で、同時に「語らないこと／語れないこと」も多くみられて、そしてそれが重要でもありました。そこでは例えば、人びとの抵抗の一形態としての沈黙や、強権的な体制下で生み出される恐怖にもとづく沈黙もありました。さらにはガチャチャ法廷での証言が、生存者のトラウマや孤立化を一層深刻なものとしていたことが指摘されているように、「語りえなさ」としての沈黙が現前することもありました。

本発表では、紛争と虐殺によって親密圏の大部分が解体され、現在もなお継続する国家の暴力下にあるルワンダの農村社会において、沈黙して静かに口を閉ざす人びとがいかにともに在るのかを考えたいと思います。多くの紛争後社会において、対立した集団間の対話や罪の自白といった、「語ること」による和解の実現と共同体の再生が目指されてきた一方で、むしろ人びとの沈黙や語りえなさとしての情動が、どのようにかれらの共存を可能にしているのかを探求していきます。

発表者のおもな調査地は、ルワンダ共和国の南部州に位置する K 村です。人口規模は約 630 人の村で、紛争以

前からフトゥが9割以上とされてきた地域です。1994年の虐殺時には、町の中心部にあるカトリック教会などで激しい戦闘があったとされます。発表者は、2010年から2018年4月まで、断続的に合計約24カ月にわたって、ルワンダにおける現地調査をおこなってきました。K村では、ある1世帯に滞在させてもらいながら、ともに暮らすなかで、人類学的な調査に従事してきました。

ルワンダの紛争において、その対立の中心を占めてきたフトゥとトゥチという民族間の関係は、植民地期以前には、すでに階層性を帯びた概念として存在していたとされます。ただし、それは当時の社会にさまざまに存在したアイデンティティのひとつにすぎず、むしろ豊かなフトゥが世代を超えてトゥチになることもあり、またその逆もありえたように、両者の関係は流動的なものでした。

ところが、ベルギーによる植民地支配をととして、その関係は人種化したものとなっていきます。ここには、19世紀のヨーロッパに普及していた「ハム仮説」が影響していました。それは、アフリカの諸文明をもたらしたのが、アラビア半島を原郷とすると考えられた「ハム」、つまり、白人と同じく、ヨーロッパ人とみなされた者だとする見解のことを指します。この理解をもとに、トゥチが非黒人の牧畜民、フトゥが黒人の農耕民であり、トゥチがフトゥを支配するのにふさわしい人種と位置づけられて、植民地政策のなかで優遇されていきました。さらに、植民地政策の遂行のために、ルワンダに居住するすべての人間の民族帰属の明確化が求められ、1930年代に民族集団を記載した身分証明書が導入されるようになりました。こうして、トゥチとフトゥの境界は次第に固定化されていったのです。

時間の都合上、詳細な説明に立ち入ることはできませんが、このようにルワンダでは、植民地政策による多大な変容を経て、植民地期末期の「社会革命」ののちに独立し、トゥチの王国からフトゥの政権へと移行します。そして、この「社会革命」以降1994年の虐殺に至るまで、ルワンダでは度重なる民族紛争を経験してきました。

1990年代前半の紛争はとくに深刻なものとなり、それは1990年10月、反政府武装勢力「ルワンダ愛国戦線(Rwandan Patriotic Front: RPF)」が隣国のウガンダより侵攻することで開始されます。このRPFは、独立直前期の「社会革命」の際に、ウガンダに難民化したトゥチの第2世代が中核となって構成されています。1994年には、多数派のフトゥのエリートや暴漢集団による、少数派のトゥチやフトゥ穏健派への虐殺が発生しました。「普通の

人びと」が殺戮に動員され、すくなくとも50万人の犠牲があったとされており、村落や共同体内にとどまらず、家族や親族集団の内部にも虐殺や脅しなどの暴力が及びました。1994年7月に、RPFが首都キガリを制圧して、紛争と虐殺は一応の終結を見ました。

軍事的勝利ののちに現政権となったRPFは、虐殺終結直後より、国民の統合と和解の政策をおこなっています。かれらは、植民地期以前のルワンダにはエスニックの差異は存在せず、調和の保たれた社会であったという理解をおこないました。そして、虐殺の被害者と加害者の和解は、植民地期以前に存在していた国家の統合を取り戻すことなしには達成されないとして、トゥチとフトゥとトゥワというエスニシティを否定します。

さらに、2008年には、虐殺イデオロギー罪の処罰に関する法律が成立して、国民を分断する恐れのある「分断主義(divisionism)」を有する者は厳しく罰せられるようになりました。しかし、そのときの「分断」という言葉には、法的な定義は与えられていないために、その不明瞭な枠組みが恣意的に用いられることに対して、多くの研究者が非難しています。

エスニシティを否定した現政権は、他方で、それを新たなかたちで再強化してもいます。たとえば、従来用いられてきた「虐殺(*itsembabwoko n'itsembatsemba*)」という言葉は、トゥチの殲滅とフトゥ穏健派の殺戮という両者の死を含意していましたが、2003年の新憲法において、その「虐殺」の表記は、「1994年のトゥチに対する虐殺(*genocide yakorewe abatutsi*)」という記述に置き換えられました。このように、トゥチの被害者性を強調することで、トゥチを一面的に「生存者」とみなし、反対に、フトゥは一様に「加害者」として同定されるようになっていきます。

これは、発表者が2011年と2016年に撮影した、同じ虐殺記念館の表札です(スライド14参照)。2011年は「虐殺(*genocide*)」という表記だけだったものが、2016年には、「トゥチに対する虐殺(*genocide yakorewe abatutsi*)」というように、トゥチの被害者性を強調するかたちでの書き直しがおこなわれてきたことがわかります。

こうして、「国家の歴史」は一元化されていきましたが、実際には、人びとの多様な経験が存在しました。たとえば、戦闘に加わらなかったフトゥ、フトゥの犠牲者、自分の身を守るために殺戮集団に参加したトゥチもありました。また、現政権となったRPFによる旧政権派の武装勢力に対する掃討作戦の被害者は、6万人に上るともいわれています。

フトウの夫を現政権軍による殺戮で亡くした女性がその出来事を語ろうとすると、そこにははっきりと、身構えを伴う沈黙が出現します。それは、「トウチの生存者」の語り方とは対照的な振る舞いです。現在のルワンダでは、「1994年のトウチに対する虐殺」以外の死を語るとは、「分断主義者」と見なされて、処罰の対象となります。かれらの身構えや沈黙は、暴力の発動可能性を感知して発現しています。

このように現在のルワンダでは、嘆くことができる者とそうではない者とが明確に区分されて、国民統合が促されてきました。以下では、虐殺記念週間に見られた人びとの情動をとりあげて、かれらが他者の不可視化されてきた痛みに対して、いかに応答しているのかを検討します。

はじめに、ルワンダにおける「虐殺生存者」について説明をします。「虐殺生存者」とは、ルワンダ語で「ナタで引き裂かれた者 (*umucitse ku icumu*)」、もしくは「残された者 (*umurokotsi*)」と呼称されます。「虐殺生存者」とされる人びとは、場合によっては道端であっても、虐殺時の経験をもとに、みずからのトウチ性を開示して強調する傾向にありました。

一方で、それ以外の大多数の村人は、紛争や虐殺時の経験、ましてやエスニシティに関して積極的に言及することはありません。繰り返しますが、国家によって否定されたエスニック・カテゴリーを口にするとは、「分断主義者」とみなされて、処罰される行為となります。しかし、1994年の虐殺が「トウチに対する虐殺」と刻印し直されてきたように、「生存者としてのトウチ」を口にして嘆くことは可能になっています。かれらは、虐殺生存者基金による援助を得たり、虐殺生存者の寡婦を支援する NGO の会合に出かけたりしています。

なお、ここで言及している「虐殺生存者」とは、国家によって承認された者たちとなりますが、K村の「虐殺生存者」とされる7人のうちの5人が、トウチの夫を亡くしたフトウの女性になります。残りの2人は、彼女たちの子どもです。つまり、K村において国家によって承認された「虐殺生存者」とは、「トウチの男性に婚出していたフトウの女性とその子ども」を指しています。

ここからは、エステルとゾエ（ともに仮名）という2人の女性の経験を中心に話を進めていきます。先にすこし説明しておけば、エステルはフトウの女性で、トウチの男性に婚出していました。しかし1994年の虐殺時に、その夫を失います。エステルは、国家に認知された「虐殺生存者」にあたります。また彼女は虐殺後、フトウの

男性と暮らすようになっています。他方で、ゾエはトウチの女性ですが、虐殺以前に結婚した夫はフトウです。彼女は現在、「虐殺生存者」というカテゴリーには入っていません。結論を先取りしていえば、この2人の女性はどちらも国家の言説には一致しない経験を有しているのですが、彼女たちの「語りえなさ」それ自体が、他者の痛みへの応答性を導いていくことを、これからみていきたいと思います。

私がエステルと出会ったのは、2011年、ルワンダでの調査を開始してまもなくのことでした。まだ慣れないルワンダ語を使って、私が彼女の家族構成を聞こうとしていた時のことです。「長男は死んじゃったわ」。あっけらかんと、でもすこし小声になってエステルはいいました。おそろおそろ、「長男は何歳だったの…?」と、私も声を落として聞いてみると、間をおいて、「まだ2歳だった」と、今度は震える声でエステルはいいました。彼女の長男は、1994年の虐殺時に民兵集団に殺されました。

話を先に進められなくなって、それからはしばらく、私はエステルに家族の話を持ち出すことができなくなりました。それまでに私が知っていた虐殺の生存者は、虐殺という壮絶な経験に比例するように、ある種の先鋭な語り口をしていることが多かったからです。ですが一方で、エステルのように言葉が押し殺されながらも発するような場面に遭遇したのは、私にとってそれが初めてのことでした。以下では、このような発話の仕方の差異がどこから生まれているのかを考えたいと思います。

ルワンダでは、1994年に虐殺の開始された4月7日からの1週間を、虐殺記念週間として位置づけています。毎年この期間には、地方行政単位の村ごとに対話集会がもたれます。「対話」とされていますが、そこでは毎日2時間程度、村人に対するある「教示」がおこなわれています。それはたとえば、「悪い歴史を繰り返さないために」、虐殺とはいかなる事態を指し、それがいかに準備されてきたのか、虐殺イデオロギーとはどのような思考で、それを人びとから除去することの必要性、そして虐殺の終結と国家再建における現政権 RPF の貢献などに関する内容が繰り返し教えられます。また集会では、「虐殺生存者」がみずからの体験を語る場面が設定されていることもあります。このように、対話集会をはじめとする各種の虐殺記念事業は、国家の歴史を広く浸透させ、また現政権の正当性を確固なものとするための場としてつよく機能しています。

対話集会では、ある程度の教育を受けた村の有力者が、行政から配布された文書を聴衆に向かって読み上げる形



式で進行します。聴衆が言葉を発する機会はあまりなく、あったとしても、基本的には教示する者が質問を促したときに限られます。答えられずに口ごもる者もありますが、政府の意向に沿っていない答えを声高にする者は見受けられません。

つぎの写真は、「虐殺生存者」に対してなされる、耕作の支援の様子です（スライド 22 参照）。虐殺記念週間の 6 日目には、村人が手分けをして生存者たちの畑を耕すことで、「不幸に見舞われた背中を支える (*gufata umugongo wagate ibyago*)」耕作の支援をおこなっています。

さて、2017 年 4 月 9 日の対話集会では、生存者たちの悲痛の叫びが突発的に表出される出来事がありました。この日の対話集会では、会の進行をしていた中等教育学校の男性教員によって、虐殺イデオロギーの危険性に関する教示がおこなわれていました。虐殺イデオロギーとは、「トウチを『ゴキブリ (*inyeuzi*)』と名指して嫌悪することで、フトウの人びとを虐殺へと駆り立てるための心理的な衝撃を下げることを可能にした思想」だという説明がなされます。そして当時、虐殺イデオロギーが教え込まれたことによって、人びとが凄惨な殺戮に手を染めたことが言及されます。

そこに、生存者たちも、彼女たちが虐殺当時に見聞きしたことを語り始めました。たとえば、もし妊娠中の女性であれば、腹を裂かれて子どもが取り出されたであろうことや、子どもが産まれていれば木臼ですりつぶされ、トイレの穴に投げ込まれていたであろうこと。そして最後は川に捨てられて、なにも残らないこと一。

そして、会を進行していた教員は、1994 年当時に村長を務めていた老人グウェナル（仮名）にある意見を求めました。つまり、虐殺イデオロギーを浸透させる契機となったであろう当時の指導者による会合や演説の有無について知っているかを問うたのです。グウェナルは言葉を淀ませて、「わたしはなにも見ていない…」とだけ、つぶやくように述べました。ここで生存者たちを中心に、グウェナルの「なにも見ていない」という発言に対して、若干の口論が巻き起こります。紛糾した会合のなかで、彼女たちは怒りをあらわにして、ある生存者の母子は、その場を退出し、またエステルは拒絶反応とともに泣き崩れました。会の間中、エステルは体を痙攣させて、決して泣きやむことはありませんでした。

補足しておけば、ルワンダにおいて政府の設定した会合は、通常、予定調和に進行することがほとんどで、このように会が紛糾する場面に立ち合ったことは、私に

としてはこれまでこの 1 回きりのことです。

しかし K 村には、虐殺によってトウチの家族の大半を失いながらも、その死を公に語ることでできない者も存在しています。ゾエは、1970 年代にフトウの男性に婚出したトウチ女性です。実の母は、1994 年の虐殺以前に毒殺されたといい、実父と兄と妹の兄弟全員は虐殺時に殺されました。虐殺当時、ゾエは 20 歳の未婚の妹とともに逃げていましたが、その途上、村の有力者の夫妻に、「あなたはフトウに婚出したのだから殺されることはない、家に帰りなさい」といわれて、家に戻って助かりました。1 人で逃げ続けた妹は、そののちに加害者集団に連行され、八つ裂きにされて川に捨てられてしまいます。

ゾエ自身も、虐殺時には深刻な暴力に晒されました。ある晩には、民兵集団が家を襲い、釘の打ち込まれた棍棒（こんぼう）を頭の上に振り落とされそうになりました。さらに、民兵の 1 人が彼女の片側の乳房を手に取り、とても長い時間握りつぶしたといいます。この出来事を境に、握りつぶされたゾエの乳房は毎週のように疼くようになりました。

ところで、ゾエは村内における「虐殺生存者」には含まれていません。したがって、ほかの「虐殺生存者」が得ている虐殺生存者基金による援助も、彼女は受領していません。その理由は、ただ彼女がフトウに婚出しているためです。現在おこなわれている対話集会などの虐殺記念事業では、トウチに婚出した者たちの経験だけが選別されて語られる一方で、ゾエのようにフトウに婚出した女性たちは「言葉をもたなかった」といいます。

対話集会をはじめとする虐殺記念事業の際には、村内の「虐殺生存者」がみずからの体験を語る場面が設定される場合もある一方で、ゾエは「言葉をも」ちません。しかし、「トウチの女性がフトウの男性と結婚すれば、フトウ女性になるのか」という発表者の問いに対して、彼女自身が「そうよ……」と答えたあとに、「でもわたしはまだトウチでもあるの」、とすぐに訂正してみせたことからわかるように、ゾエのアイデンティティとは、元来重なりつつ存在しているものです。それに、国家によって承認された「虐殺生存者」の体験とゾエの体験とは、どちらも「トウチに対する虐殺」という枠組みの中で生じた出来事のはずです。ここに、人びとのあいだには格差を伴う承認の配置が存在しています。

ただし、彼女の苦難の経験は、村中の誰もが知るところでもあります。ガチャチャ法廷では、ゾエもその夫も、彼女の家族が犠牲となった事件について大衆の前で発言し、40 人にも上る加害者も特定されたといいます。物的

損害に対する賠償も、一部は支払われています。

ゾエは、疼くようになった乳房の原因について、それは「起こったけれど知られていない」といい、「静かにしているだけ」だと、発表者との会話の中で繰り返し語りました。それは彼女が、「言葉をもたない」状況にあるということだけではなく、話すことによって、それが、なにより彼女の平穏を奪うからでもあるのだろうと考えられます。

虐殺時に、ゾエはともに逃げていた妹を、みずからが夫のもとに戻ったのちに失ってしまいますが、そこに話が及んだとき、彼女の声や表情はいつも虚ろになります。極限状況の経験に関しては、生き残った者たちを支配する罪の意識が指摘されていますが、ゾエの場合もまた、妹を失った記憶に直面する際、妹の代わりに自分が生き残ってしまったことへの負い目、もしくは彼女を殺したのは自分であったかもしれない、といった思考が開始されようとする、意識の管理することもできない主体の被害性において、深い沈黙が現出していると考えられます。このように、ゾエは公で語ることが期待されていないだけではなく、むしろみずからを配置不可能な不明瞭さのままに維持するために、「言葉の欠落」を甘受しているのかもしれない。

そしてゾエのような立場の者以外にも、1994年の虐殺時に晒されたみずからの恐怖を公然と語ることができない者は、多く存在しています。たとえば、通りすがりの見ず知らずのタッチの少女を匿うことになったフトウの家族が、少女を匿うことで度々晒された恐怖がありました。また、フトウの「加害者」とされる人たちも、その経験は一様ではありません。民兵集団に加入した者の多くが、同じフトウの集団内の脅迫や脅しによって動員された者たちであったことが指摘されています。かれらは「怖くて」、民兵集団への参加を拒否することはできませんでした。その証拠に、虐殺時には多くのフトウが集団でおこなわれる殺戮に加担しながらも、個人的には、タッチの家族や友人、知らない者すらをも救おうとするような行為がみられていたのです。さらには、加害行為をおこなわなかった人びとも、「怖くて農業もなにもできるわけがなかった」というように、ほとんどの人びとが日常すらままならないなかを過ごしていました。このように、虐殺時には「生存者」とされる人びとだけではなく、「加害者」も、そのどちらでもない者も、したがって村の大半の者がさまざまな位相でなんらかの脅威に晒されていました。

アウシュビッツの生存者であるブリーモ・レーヴィは、

極限状況下における人間存在が単純に善と悪とに二分できない「灰色の領域」が存在していることを指摘しました。ルワンダの虐殺においても、個人の抱え持つ経験や存在自体の複雑さという意味においても、また、それぞれの体験が国家によって明確に二分されたカテゴリーには当てはまらない微妙なものであるという意味においても、村の大半の人びとが「灰色の領域」にある者たちだといえます。

さて、2017年の対話集会で泣き崩れたエステルに話を戻して、彼女に到来する「語りえなさ」がどのようなものかを見ていきたいと思います。エステルは、1991年にK村内でタッチの男性に婚出していました。しかし1994年の虐殺時に、夫は川に連行されて殺されてしまいます。幼い長男も、民兵集団によって家の近くで殺されたといえます。虐殺当時、エステルは妊娠しており、生家に身を寄せていました。そして、虐殺のただなかであった1994年の5月に、長女を出産します。産まれたばかりの長女だけは、当時でウシ1頭が買えるほどの金を民兵たちに渡して懇願し、なんとか見逃してもらったといえます。

エステルは、虐殺のすぐあとに、殺された夫と暮らしていた土地に自力で小屋を建てて、そこで生活を再開しました。以前の家は破壊され、当時所有していた家畜も畑の実りも、すべて略奪されたといえます。また彼女は、生活を再開するにあたって、数枚だけ持っていたという夫の写真も、すべて燃やしてしまったそうです。

1996年になると、彼女の前に1人の男性が現れます。その男性シリル（仮名）はK村に1区画の土地を購入して、そこに家を建て、亡き夫の土地を耕し続けるエステルと暮らし始めるようになりました。シリルとエステルのあいだには、その後3人の子どもが産まれます。ただし、かれらは行政を介した婚姻の手続きを踏んではいません。したがって、土地や家畜などの財産は、すべて分けて所有しています。シリルはどうしようもない酒飲みであり、畑仕事もほとんどしません。それをときに不満げに語るエステルに、「別れたいとは思わないの?」と問えば、「それは子どもにとってよくないから」と彼女はつよく拒否してみせるのでした。

これは、虐殺後にエステルが建てた小屋です（スライド35参照）。

エステルのこのような反応に対して、他方で彼女と同じように虐殺時にタッチの夫を失った女性の多くは、その後一度は別のフトウ男性と再婚しますが、のちにその男性と離別してしまうことが多く見受けられます。彼女たちは、虐殺生存者基金をとおした援助による経済的な

支援や家の建設などの恩恵を受けようとして、虐殺後に再婚したフトウの男性と離別します。つまり、虐殺時には自分がトゥチ男性の妻であった、すなわち、みずから「国家の歴史」に合致した「真正な生存者」であることを強調して、彼女たちはその援助を得ようとしています。

一方で、エステルは再婚したフトウの男性と決して別れることはありません。また、虐殺記念週間の6日目におこなわれる近隣住民による耕作支援も、彼女は「虐殺生存者」のなかで唯一辞退していました。つまり、日常において彼女はいま、「虐殺生存者」であることを後退させて、村の関係性のなかで生きていこうとしています。ここにこそ、エステルの経験した1994年の虐殺に対する「語りえなさ」が見いだされます。エステルもまた「灰色の領域」を生きる者なのであり、彼女が地域社会のなかで生きようとするときには、みずから選択したその立場と「国家の歴史」のもたらすカテゴリーとが、いつも常に異なってきたという事態を前にして、虐殺にかかわる自身の経験を決して語り慣れることはありません。ほかの「虐殺生存者」たちが、公の場においてはおよそ流暢で淡泊な語りのもとに、みずからの経験を「国家の歴史」に一致させて「真正な生存者」として振る舞ってきたこととは対照的に、エステルやゾエ、それに村の大多数の人たちが発表者に向けてみせる語りは、いつもどこか不安定さを抱えているのです。

ところで、老人グウェナルの発言によって紛糾した対話集会の、ときに村が分断しうるような場面において、村長は会の終盤に以下のように述べて、人びとを共生へと導こうとしていました。

「なにかを述べる前に、もう一度グウェナルが見聞きした詳細を聞きたいと思うのだが… [しかしグウェナルからの反応はありません]。…幼い子どもたちは、K村で起こったことを学ばなくてはならない。会の最初でわたしが述べたように、K村で起こったことは、M村やN村で起こったこととは違う。それらはすべて個別の出来事である。… (中略) …会に参加した者の多くは、傷ついた者たちを目撃した。それは傷である。傷ついていない者はここにいないだろうか、誰もいない。誰もが傷ついたのである。もし傷ついていない者がいるというのなら、わたしは彼らの心がどのようなものがわからない。傷ついていないあなたには、愛がない」。

国家が定める「歴史」においては、1994年の虐殺は、「トゥチが生存者でフトウが加害者」であるとして、明確な二元化のもとに語られてしまう一方で、村長は、1994年にK村で起きた虐殺は、あくまでもK村の出来事であ

あったという特異性を強調します。そのことによって村長は、字義どおりにK村で起こった出来事がほかの村と異なっていたということを強調したいわけではありません。むしろ、「1994年の虐殺」という出来事は、「国家の歴史」の提示する二元化したカテゴリーには還元できない、あくまでも個々人の個別具体的な体験によって構成されているという認識を、住民のあいだに堅持しようとする試みだったと考えられます。

村長自身も、虐殺時には知らない少女を匿って、それに伴う恐怖に晒されていたように、ほとんどの人びとは、1994年のK村に「トゥチに対する虐殺」だけではない、さまざまな脅威が存在し、それぞれが多様な経験をしてきたことを十分に想像できることが想定されています。だからこそ、その場に泣き崩れることのできたエステルのような「真正な生存者」がみせた深い傷口に、多くの人も反応して、それを目撃したわたしたちもやはり「傷ついた」であろうことが、村長によって聴衆に確認されるのでした。

ゾエもまた、紛糾した対話集会の1年後に、発表者との会話でこう述べています。「虐殺に関しては、もうなにも問題ない。人びとが『みずからのたてなおし』を教えしてくれるように、わたしも自分でそれをなんとかしようとしているところ。それに、わたしよりも深く傷ついている人がいることも、これまでにみてきたから…」と。

ゾエの乳房に到来する疼きは、間違いなくエステルの慟哭にも反応して、他者の脆さへの気づきとなっていました。しかし、わたしたちの傷や痛みは、本来共有することが不可能で、それは徹底的に孤独のうちに引き受けなければならないものです。それは数値化して測れるものでもなく、したがって、どちらの傷がより深いかということと比較することなど、本来できないものです。しかしだからこそ、他者の傷や痛みが理解しきれないものであるという認識において、かれらは複雑なままの〈わたしたち〉として、他者との関係を更新し続け、ひいては、自分自身を「たてなおす」ことにつながっていたのだと考えられます。

さて、会合の終盤に返答は得られなかったものの、村長がまずもってグウェナルに話を戻したことには、「国家の歴史」の構図のなかで、「真正な生存者」に敵対する人物としてグウェナルを定めるためではなく、むしろ、容易に批判的となりかねない彼を排除しなくてすむように、あくまでもK村の出来事として「学ぶために」「聞きたい」ことが慎重に説明されるのでした。グウェナルの沈黙にもまた、二元化された「歴史」においては、語



ることのできない痛みを抱える人物に違いないという想像力が発動されます。事実、グウェナルも虐殺時には、物品を狙った民兵集団から家を焼き払われ、頭部を殴打されるという悲惨な事件を経験していたことを、発表者は以前に本人から聞いていました。

このように、他者の苦しみに対する応答性は、必ずしも国家が承認した嘆くことができる者だけに向かうのではなく、むしろ「語りえないこと」を媒介として、地域の指導者によって、地域の文脈において、多様な経験を有する者たちに開かれるように導き直されていくのです。

結論に移ります。ルワンダでは村に暮らす大半の者が、虐殺時にはなんらかの脅威に晒されており、さらには、善悪に二分できない「灰色の領域」にありました。かれらは、みずからの体験と「国家の歴史」との齟齬のために、または周囲との関係性や、飼い慣らすことのできない記憶に対する個人の被傷性のために、沈黙します。

しかし、それらの「語りえないこと」とは、それ自体が媒体となって、他者の痛みへの想像力が開示されるものとなりえます。言語表象の作用がものごとの単独性を一般化することであるならば、そのとき沈黙、もしくは「語らないこと」とは、みずからの経験の普遍化を断固として拒否することになるからです。

さらには、国家によって統制されえない身体化された記憶、「語りえなさ」の発露としての情動において、人はそこに相手の痛みを受け取ってしまうのであって、それこそが無二のあなたに関する共約不可能な体験や記憶と、それに付随する苦しみに対する想像力の回路を開くものとなります。つまり、人びとの情動や沈黙は、共有不可能なものとして立ち現れつつも、それが記憶に対する主体の被傷性や受動性の表れであるがゆえに、むしろそこには応答的な関係性が生じうるものとなります。

ゾエが現在、他者の痛みへの想像力を媒介としながら「みずからのたてなおし」を試みているように、具体的な「あなた」と「わたし」という関係において、自他の根本的な脆さを不断に認識するところから、人が他者と共在し、共生する可能性は開かれます。ここにこそ、避けがたくともに生きる人びとの、倫理的な応答の可能性があるのではないのでしょうか。

ご清聴、ありがとうございました。

国際シンポジウム  
『共有できない平和、争いが移動する』  
2019年11月9日@立命館大学

## 沈黙する発話、情動する身体 ールワンダに生き残る暴力の記憶と痛みへの想像力ー

近 藤 有希子  
(日本福祉大学 国際福祉開発学部)

①



- ◆ 面積： 26,338km<sup>2</sup> (≒四国の1.4倍)
- ◆ 人口： 12,187,400人 (2018年)
- ◆ 人口密度： 463人/km<sup>2</sup>

②



『千の丘の国』と呼ばれるルワンダ

③





## ルワンダの「民族紛争」

▫ 民族集団：

◆ **フトゥ Hutu**（8割強）、**トゥチ Tutsi**（1割強）、トゥワ Twa（1%）

▫ ルワンダ虐殺の公的な言説：

◆ 「多数派の**フトゥ**による少数派の**トゥチ**に対する虐殺」

⇒ 一枚岩の民族集団間の対立というイメージ

## ルワンダの国家と継続する暴力

### ▫ ルワンダの国家に対する相反した評価：

- ◆ 虐殺後の人びとの和解と迅速な経済開発を達成した「優等生」国家  
[Kinzer 2008]



- ◆ 政治・経済・社会環境を軍事化し、締め付けを強める「強権的」な国家 [Thomson 2011; Reyntjens 2013]

- ◆ 多様な暴力の記憶の選別と一元化による、紛争再発への懸念  
[Reyntjens 2004; King 2010; Burnet 2012; Ingelaere 2013]

- ◆ ⇒ 偏在する暴力を予感して身構える人びとの存在 [cf. 富山 2002: 28]

7

## 「語ること」による共同体の再生？

### ▫ 西欧型の紛争解決：

- ◆ 「語ること」が、真実を同定して合意を促し、歴史を定位するうえで優位な行為 [Väyrynen 2011]

・ cf. 批判的な討論や対話をとおした市民的公共圏 [ハーバーマス 1994]



### ▫ ルワンダのガチャチャ(gacaca)法廷：

- ◆ 「語らないこと」が頻繁に現出 [Doughty 2015]
  - ・ 国家権力に対する「抵抗」としての沈黙 [Buckley-Zistel 2006; Thomson 2011]
  - ・ 罪責性を問う流れを阻止する構えとしての沈黙、無罪を証明する困難による沈黙 [Retting 2011]
  - ・ 強権的な体制下における恐怖による沈黙 [Burnet 2012]
  - ・ 生存者のトラウマと孤立化による沈黙 [Brounéus 2008]

8

## 本発表の目的

紛争と虐殺によって親密圏の大部分が破壊され、  
現在もなお深刻な国家の暴力下にあるルワンダ農村社会において、  
沈黙し、静かに口を閉ざす人びとは、いかにともに生きるのか

多くの紛争後社会において、  
「語ること」による和解の実現や共同体の再生が目指されてきた一方、  
むしろ人びとの沈黙や「語りえなさ」としての情動が、  
どのようにかれらの共存を可能にしているのかを探求する

9

## 調査地概要

- 位置：南部州ニャマガベ県の一農村（K村）
- 人口：約630人、141世帯（2011年）
- ◆ 紛争以前からフトゥ住民が大多数 [Verpoorten 2005]
- ◆ 1994年の虐殺時には教会などで激しい戦闘を経験 [Des Forges 1999]
- 調査期間：2010年11月～2018年4月、断続的に計約24か月間
- 調査方法：聞き取り調査、直接および参与観察

10

## フトゥとトゥチの動態

- 植民地期以前：多様なアイデンティティのひとつ
- ◆ 両者の境界は柔軟で、容易に変更可能 [Newbury, D. and C. Newbury 2000]
- 植民地期：19世紀西洋の人種思想「ハム仮説」にもとづく支配
- ◆ 「トゥチによるフトゥの支配」という理解のもとトゥチの優遇政策 [Chrétien 2003]
- ◆ 1930年代、エスニック集団を明記したIDカードの配布 [Longman 2001]  
⇒ エスニック・アイデンティティの固定化と本質化
- 1959年からの「社会革命」：植民地期末期の政治変動
- ◆ 封建的なトゥチ王制 ⇒ フトゥ・エリート主導の権力構造へ
- ◆ 1962年の独立以降も、度重なる「民族紛争」を経験

11

## 1990年代前半の紛争と虐殺

- ◆ 1990年10月、反政府武装勢力「ルワンダ愛国戦線」（Rwandan Patriotic Front: RPF）が、隣国ウガンダより侵攻
  - \* RPFは、1959年以降の「社会革命」時に、隣国ウガンダに離散したトゥチの難民第2世代を中心に構成
- ◆ 1994年の虐殺時には、「普通の人びと」 [Straus 2006] が殺戮に多数動員され、約100日間ですくなくとも50万人の犠牲
- ◆ 多数派であるフトゥのエリート層や「暴漢」集団による、少数派のトゥチやフトゥ穏健派に対する殺戮 [武内 2009]
- ◆ 虐殺時には村落や共同体内にとどまらず、家族や親族集団の内部にも殺戮や脅しなどの暴力がおよぶ [Des Forges 1999]
- ◆ 1994年7月、RPFが首都キガリを制圧し、一応の終結

12



## 国民の統合と和解の政策

### エスニシティの否定

- 前植民地期の理想化：[RoR 1999]
  - ◆ ⇒ トゥチ(14%)、フトゥ(85%)、トゥワ(1%)の否定
  - ◆ 「虐殺イデオロギー」の処罰に関する法の制定
    - ⇒ 「分断主義」(divisionism) は 厳しい取り締まりへ [RoR 2003; RoR 2008]
  - ◆ 「分断」の法的定義の不在
    - ⇒ 政権の恣意的な利用への危惧 [Waldorf 2009; Reyntjens 2013]

### 新たなカテゴリー化

- 表記の変更：
  - ◆ 「虐殺」(*itsembabwoko n'itsembatsemba*)
    - ↓
    - 「トゥチに対する虐殺」(*jenocide yakorewe abatutsi*)
  - ◆ ⇒ 「トゥチ＝生存者」(*rescapé*)  
「フトゥ＝加害者」(*génocidaire*)  
という二分的カテゴリーを生成 [Eltringham 2004; Burnet 2012]

13

## 「虐殺」から「トゥチに対する虐殺」の表記へ

- ◆ 2011年：「虐殺」(*jenocide*)
- ◆ 2016年：「トゥチに対する虐殺」(*jenocide yakorewe abatutsi*)



14

## 不可視化された死

- 多様な経験の存在：
  - ◆ 戦闘に加わらなかったフトゥ、フトゥの犠牲者、自身の身を守るために殺戮集団に参加したトゥチ…
  - ◆ 現政権RPFによる旧政権派の武装勢力に対する掃討作戦の被害者は、25,000～60,000人とも [Des Forges 1999: 18]
- フトゥの被害者の身構えと沈黙
  - ⇔ トゥチの虐殺生存者の流暢な語り：
  - ◆ 「トゥチに対する虐殺」以外の「隠された死」[Ingelaere 2013] を語ることは「分断主義者」とみなされて、処罰の対象に
    - ⇒ 暴力の発動可能性を感知して、身構える

15

## 沈黙への応答

写真：町の教会における虐殺記念集会  
(2017年4月発表者撮影)



- ◆ 以下では、虐殺記念週間にみられた人びとの情動をとりあげて、人びとが他者の不／可視化されてきた痛みに対していかに応答しているのかを検討する

16

## 嘆くもの

- 「虐殺生存者」：「ナタで引き裂かれた者」(*umucitse ku icumu*)  
もしくは「残された者」(*umurokotsi*)と呼称
- ◆ 国家に承認された「虐殺生存者」は、「トゥチ」性を開示して嘆く  
⇒ cf. 通常、エスニシティへの言及は「分断主義」とみなされる
- ◆ 「虐殺生存者」に対する各種支援の存在
- ◆ K村内では、7人（女性6人・男性1人）が該当
  - ・ 7人のうち5人が、「トゥチの夫を亡くしたフトゥの女性」
  - ・ 残りの2人は、彼女たちの子ども

17

## 本発表の主要な登場人物

	エステル	ゾエ
本人のエスニシティ	フトゥ	トゥチ
夫のエスニシティ	トゥチ (虐殺時に死別)	フトゥ
「虐殺生存者」	○	×
現在の生活	フトゥ男性と「再婚」	夫と暮らす

- ◆ 2人の「語りえなさ」⇒ 他者の痛みへの応答性を引き出しうる

18

## エステル語りから

- ◆ エステルと出会ったのは、2011年、調査を開始して間もなくのこと。発表者はエステルの家族構成を聞こうとしていた
- ◆ 「長男は死んじゃったわ」。あっけらかんと、エステルはいう。「何歳だったの…？」と、声を落として聞いてみる。「……まだ2歳だった」と今度は震える声で、彼女はいった
- ◆ エステルの長男は、1994年の虐殺時に民兵集団によって殺された
- ◆ 言葉が押し殺されながら発される場面に遭遇したのは、発表者にとっては初めてのことだった ⇔ cf. 虐殺生存者の流暢な語り (2011年)

◆ ⇒ 発話の仕方の差異は、どこから生まれているのだろうか？

19

## 虐殺記念週間について

- 虐殺記念週間：毎年4月7日～13日の一週間を指す
- 対話集会：
  - ◆ 虐殺記念週間中、毎日15時より2時間程度で、村ごとに開催
  - ◆ 「悪い歴史を繰り返さないために」、「トウチに対する虐殺」とはなにか？なぜ起こったのか？救ったのはだれか？（→現政権RPF）「虐殺イデオロギー」がいかなる思考で、それを除去する必要性等についての、政府の見解が教示される
  - ◆ 「虐殺生存者」がその体験を語る場が設定されることも（2018年）
- ◆ ⇒ 「国家の歴史」を流布し、政権の正統性を高める場として機能

20

## 対話集会のようす

- ◆ 村の有力者が、行政から配布された文書を読み上げる形式で進行
- ◆ 聴衆が言葉を発する機会は、そのほとんどが、教示する者が質問を促したときに限られる
- ◆ 政府の意向に沿わない答えを声高にする者はいない

21



## 近隣住民による耕作支援

- ◆ 虐殺記念週間の6日目に、村人が「虐殺生存者」の畑を耕すことで、「不幸に見舞われた背中を支える」  
(*gufata umugongo wageze ibyago*)

写真：近隣住民による耕作支援のようす  
(2017年4月発表者撮影)



22

## 2017年4月9日の対話集会

### □ 「虐殺イデオロギー」の危険性についての教示：

- ◆ 「トウチを『ゴキブリ』(*inyenzi*)と名指して嫌悪することで、フトゥを虐殺へと駆り立てるための、心理的な障壁を下げる思想」
- ◆ 「虐殺イデオロギー」がなんらかの会合で教え込まれたことによって、人びとが凄惨な殺戮に手を染めたという説明

### ◆ 生存者たちによる凄惨な殺戮に関する証言：

- ・ もし妊娠中の女性であれば、腹を裂かれて、子どもが取り出された…生まれていれば木臼ですり潰され、トイレの穴に投げ込まれていた…もし子どもを殺すように命じられて「できない」といえば、その子は踏み潰されてしまうだろうこと…そして最後は川に捨てられて、なにも残らないこと…

23

## 2017年4月9日の対話集会：集会の紛糾

### □ 進行役が老人グウェナルに意見を求める

- ◆ グウェナル（フトゥ）は、1994年当時の村長
- ◆ 「虐殺イデオロギー」を浸透させる契機となったであろう、当時の指導者たちによる会合や演説の有無について
- ◆ グウェナルによる返答：「わたしはなにも見ていない…」

⇒ グウェナルの発言に対する口論の発生

- ◆ 周囲の混乱：「グウェナルが知らないはずはない」

24

## 2017年4月9日の対話集会：エステルへの慟哭

### □ 生存者たちの情動：

- ◆ トウチの夫を亡くしたある女性とその娘は場を退出
- ◆ エステルは泣き崩れて痙攣し、会の間中、泣き止むことはなかった
- ◆ \* 政府の設定した会合が紛糾することは、通常ほとんどない

写真：エステルを乗せた救急車



25

## 本発表の主要な登場人物

- ◆ 1994年の虐殺によってトウチの家族の大半を失いながらも、その死を公で語ることはできない者も存在している

	エステル	ゾエ
本人のエスニシティ	フトゥ	トウチ
夫のエスニシティ	トウチ (虐殺時に死別)	フトゥ
「虐殺生存者」	○	×
現在の生活	フトゥ男性と「再婚」	夫と暮らす

26

## ゾエの体験：妹の死と乳房の疼き

- ◆ 1970年代にフトゥの男性に婚出したトウチ女性
- ◆ 実父とキョウダイは1994年の虐殺時に殺害される
- ◆ 虐殺時、ゾエは20歳の未婚の妹と逃げていた
- ◆ 村の有力者に「あなたはフトゥに婚出したのだから、殺されることはない、家に帰りなさい」といわれて、夫の元に戻り助かる
- ◆ ひとりで逃げ続けた妹は、民兵集団に連行されて、八つ裂きにされ、川に捨てられてしまう
- ◆ ゾエも、釘の打ち込まれたこん棒を頭に振り落されそうになり、また片側の乳房を、とても長い時間握りつぶされた一。  
乳房は毎週のように疼くように

(2018年4月)

27

## ゾエの現在：言葉の欠落

- ◆ ゾエは、国家による「虐殺生存者」にはふくまれていない
- ◆ 虐殺生存者基金による援助も、受領していない
- ◆ その理由は、ゾエがフトゥに婚出したため
- ◆ 対話集会においても、彼女は「ただ座っているだけ」で「耐える」しかないのだと感情的に述べて、ゾエのようにフトゥに婚出したトゥチ女性たちは「言葉をもたなかった」 (*nta jambo twagiraga*) という

28

## 格差をともなう承認の配置

- 重層的なアイデンティティ：
  - ◆ ゾエ：「〔フトゥ男性と結婚したけれど〕私はまだトゥチでもあるの」
- ゾエの個的体验：
  - ◆ 「トゥチに対する虐殺」の範疇で起こった出来事
  - ◆ しかし現在、「トゥチの生存者」でも「フトゥの加害者」でもない
  - ◆ ⇒ 「格差をともなう承認の配置」の存在 [cf. バトラー 2012]
- ◆ cf. ガチャチャ法廷での証言
  - ・ ゾエも夫も大衆の前で発言、40人にもものぼる加害者も特定
  - ・ 物的損害に対する賠償も一部は支払われている
  - ⇒ ゾエの経験は、村のほぼ全員が知っている

29

## 語りえない痛み

- 到来する乳房の疼き：
  - ◆ 「起こったけれど、知られていないこと」
    - ⇒ 「静かにしている」ことによる平穩の死守
- 妹の死を語るときの虚ろさ：
  - ◆ 生き残りを支配する罪の意識 [cf. 石原 2000; アガンベン 2001; レーヴィ 2014]
    - ⇒ 意識が管理することのできない主体の被傷性において、深い沈黙が現出
- ◆ ⇒ 自己を不明瞭さのままに維持するための、言葉の欠落の甘受

30



## 灰色の領域

- 「国家の歴史」におさまらない人びとの経験：
  - ◆ 通りすがりのトゥチの少女を匿ったフトゥの家族が曝された脅威 [cf. Des Forges 1999]
  - ◆ 脅しや脅迫によって「怖くて」、民兵集団に動員されたフトゥの男性 [cf. Straus 2006]
    - ・ cf. 多くのフトゥが、集団でおこなわれる殺戮には加担しながらも、個人的にはトゥチの家族や友人、知らない者をも救おうとしていた [Fujii 2009]
  - ◆ 「怖くて農業もなにもできなかった」という村の大多数の人びと
    - ⇒ 「生存者」だけでなく「加害者」も、それ以外の大半の者も、1994年の虐殺時にはなんらかの恐怖に曝されていた
- ◆ 極限状況下で善悪に二分できない「灰色の領域」 [cf. レーヴィ 2014]

31

## 本発表の主要な登場人物

- ◆ 「虐殺生存者」であるエステルに到来する「語りえなさ」とは、どのようなものだろうか

	エステル	ゾエ
本人のエスニシティ	フトゥ	トゥチ
夫のエスニシティ	トゥチ (虐殺時に死別)	フトゥ
「虐殺生存者」	○	×
現在の生活	フトゥ男性と「再婚」	夫と暮らす

32

## エステルの体験：夫と息子の死、娘の死守

- ◆ 1991年にトゥチの男性に婚出。結婚後に1人の男児を産む
- ◆ 1994年、村で虐殺が開始してすぐに、夫は町のカトリック教会に逃げようとするも、道中で民兵集団に捕まる。幼い長男も殺される
- ◆ 妊婦であったエステルは、生家（フトゥ）に身を寄せる
- ◆ 1994年5月13日、虐殺の最中に長女を出産
- ◆ 生まれたばかりの長女だけは、民兵集団に当時でウシが1頭買えるほどの金（10,000Rwf）を渡して懇願し、なんとか見逃してもらう

(2018年4月)

33

## エステルの現在：フトゥ男性との再婚

- ◆ 虐殺後すぐに、トゥチの夫と暮らしていた土地に自力で小屋を建て、生活を再開
- ◆ 数枚だけ持っていた夫の写真も燃やしてしまった
- ◆ 1996年、男性シリル（フトゥ）と出会う
- ◆ シリルはK村に一区画の土地を購入して、エステルと暮らすように
- ◆ エステルとシリルのあいだには、その後3人の子どもが生まれる
- ◆ 行政を介した婚姻はしていないが、シリルは「夫」として周囲から認知されている
- ◆ 酒飲みでだらしないシリルへの不満、しかし別れる選択はしない

(2018年4月)

34



35

## 語り慣れることのない発話の意味

□ cf. 虐殺時にトゥチ男性に婚出していたフトゥの女性たち：

- ◆ 一度は別のフトゥ男性と再婚するも、のちに離別することが多い  
⇒ 「虐殺生存者」として経済的な援助の恩恵を受けるため



□ 周囲の者と相違なく生きようとするエステル：

- ◆ だらしない（フトゥの）「夫」と生活し続けるという静かな覚悟
- ◆ 近隣住民による耕作支援の辞退
- ◆ エステルの「語りえなさ」：「虐殺生存者」であることを排する  
⇒ みずから選択した立場が、「国家の歴史」とは異なってしまう  
という事態を前に、決して語り慣れることがない

36

## 2017年4月9日の対話集会：混乱した場のその後

村長：「なにかを述べる前に、もう一度グウェナルから当時見聞きした詳細を聞きたいと思うのだが… [しかしグウェナルからの反応はない]

… (中略) …

幼い子どもたちは、K村で起こったことを学ばなくてはならない。会の最初で述べたように、K村で起こったことは、M村やN村で起こったこととは違う。それらはすべて、個別の出来事である。

… (中略) …

会に参加した者の多くは傷ついた者たちを目撃した。それは傷である。傷ついていない者が、ここにいるだろうか？ だれもいない。だれもが傷ついたのである。もし傷ついていない者がいるのなら、わたしにはかれらの心がどのようなものかわからない。傷ついていないあなたには、愛がない」

(2017年4月)

37

## 「国家の歴史」に抗するかけがえのない記憶

□ 「K村の出来事」という強調：

- ◆ 「1994年の虐殺」が、二元化したカテゴリーには還元できない、個々人の個別具体的な体験によって構成されている、という認識を堅持しようとする試み

≠ 二元化した「国家の歴史」：「トゥチ＝生存者」「フトゥ＝加害者」

- ◆ 公に嘆くことのできる「虐殺生存者」の傷口を目撃したわたしたちも、同様に「傷ついた」ことの確認

38

## 他者の脆さへの気づきと自己のたてなおし

ゾエ：「虐殺については、もうなにも問題ない。周囲が『みずからのたてなおし』を教えてくれるように、わたしも自分でそれをなんとかしようとしているところ。それに、わたしよりも深く傷ついている人がいるということも、これまでにみてきたから…」

(2018年4月)

- ◆ ゾエに到来する乳房の疼きは、エステルへの慟哭に反応して、他者の脆さへの気づきをもたらした
- ◆ ただし、痛みは共有不可能で、徹底的に孤独に引き受けるしかない。本来どちらの傷がより「深い」かを比較することは不可能
- ◆ ⇒ 他者の痛みを理解しきることはなく、複雑なままの〈わたしたち〉として、他者との関係を更新しながら、「みずからをたてなおす」

39



## 多様な痛みに対する応答

▫ 現村長による老人グウェナルへの配慮：

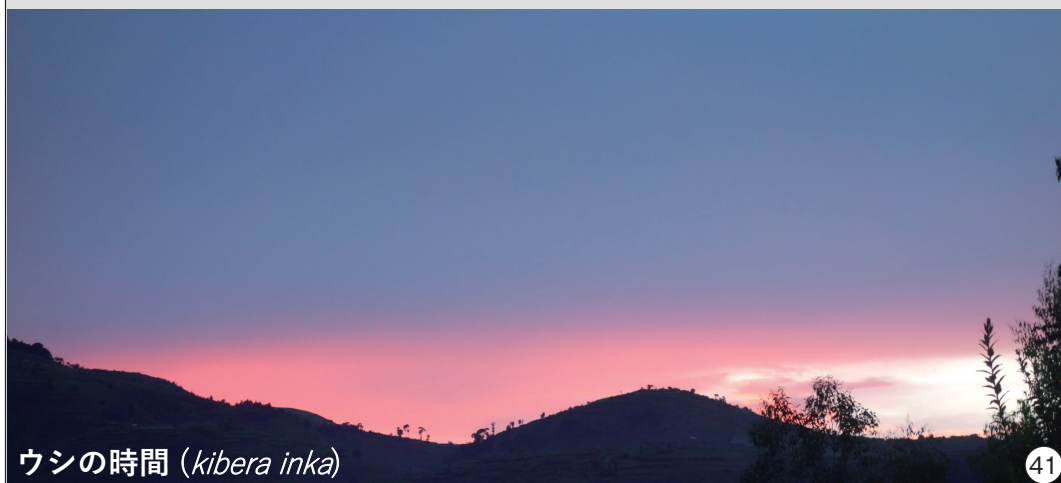
- ◆ 敵対する人物として排除しないよう、「学ぶために」「聞きたい」
- ◆ 身構える彼もまた、語ることのできない痛みを抱える人物に違いがないという想像力の発動

・ 虐殺時にはグウェナルも、民兵集団から家を焼き払われて、頭部を殴打されていた

- ◆ ⇒ 「語りえないこと」を媒介として、多様な経験を有する者たちに向かう応答性

40

## 結 論



ウシの時間 (kibera inka)

41

## 代替不可能な痛みへの想像力と応答可能性

▫ 「語りえないこと」の重層性

- ◆ 国家の言説との齟齬／周囲との関係性／記憶に対する主体の被傷性

▫ 痛みの分有の可能性

- ◆ 物事の単独性を一般化する「ことば」の作用 [梅村 2017: 17-21]

⇔ **経験の普遍化を拒否する沈黙**

- ◆ 身体化された記憶や「語りえなさ」の発露としての情動において、共約不可能な体験とそれに付随する痛みへの想像力の回路をひらく

- ◆ ⇒ 避けがたくともに生きる人びとの、倫理的な応答の可能性

42

